

私たちの目で、直接「安全」を確かめてきました。 10年に一度の貯槽内部点検。 — 伊賀の暮らしを守る20トンタンク、次なる10年へ。

ホームガス課 森田 裕樹

日頃よりアポロ興産をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。

皆様が毎日お使いのLPガスを蓄えている、街のエネルギーの要「20トン貯槽」。去る4月25日～27日、この巨大なタンクの安全性を隅々まで確認する、10年に一度の「開放検査」を実施いたしました。

専門検査に加え、 社員も自らタンクの内部へ

今回の点検では、専門の検査会社による最新機器を使った精密診断はもちろんのこと、当社の従業員も実際にタンクの内部へと入りました。普段は液化ガスで満たされているため、決して見るできないタンクの内側。10年に一度、ガスをすべて抜き取るこの貴重な機会に、自分たちの目で直接「地域のエネルギーを守る貯槽」の健全性を確かめるためです。

ライトを手に漆黒の内部へ足を踏み入れた社員たちは、専門家の指導のもと、鋼鉄の壁に傷や腐食がないかを目視で確認。冷ややかな空気が張り詰める中、改めて自分たちが扱うエネルギーの重みと、それを守る責任の深さを肌で感じる時間となりました。

「異常なし」を確認し、 確かな自信を皆様へ

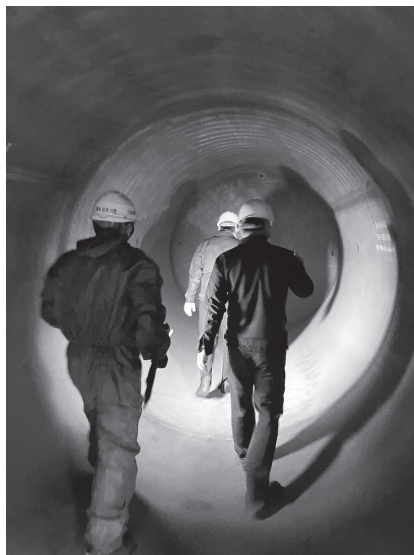
精密な超音波検査と、私たちの目による直接の確認。その両面から導き出された結果は「異常なし」。20トンタンクは、これからも10年、20年と安心して使い続けられる極めて良好な状態であることが証明されました。

見学に参加した社員はこう語ります。「自分たちの目でタンクの隅々まで確認したことで、自信を持って皆様に『安全です』とお伝えできる実感が湧きました。この鉄の壁が、伊賀の皆様の温かな暮らしを守っているのだと、身が引き締まる思いです」

これからも、 安心のパートナーとして

検査を終えた貯槽は、再び厳しい安全テストを経て、今日も伊賀の街へガスを送り届けています。目に見える場所も、目に見えない場所も。私たちはこれからも、自分たちの目と手で徹底した管理を行い、皆様の暮らしに寄り添う「一番身近で安心なエネルギーパートナー」であり続けます。

今回の検査にご理解とご協力をいただきました地域の皆様へ、心より感謝申し上げます。



アポロ新聞

伊賀のあれこれ

ホームガス課 宮本 剛佳

皆様、日頃よりアポロ興産株式会社をご利用いただきありがとうございます。皆様は、伊賀で有名なものといえば何を思い出しますか？ 伊賀上野城や、松尾芭蕉、伊賀牛などいろいろとありますが、

その昔傘作りが盛んだったことは知っていますか？

生産が始まった時期ははっきりしていないようですが、藤堂藩の末期、下級武士の内職が発端となっているそうです。幸いにして河川の沿岸を中心にして竹が多く、紙も名張地方で盛んに作られていたのも、原料を得るのが容易でした。更に明治16年頃の資料によると上野市街の年間生産量が6万7,850本とされています。その内訳は、桑町4万本、中町6,500本、赤坂町6,050本、小玉町6千本、恵美須町2千本、農人町1,500本、西日南町800本となっているそうです。

その当時の伊賀傘は粗悪品が多く評判も良くなかったそうです。そこで上野商工会長の職にあった田中氏は信用回復の為に『伊賀傘同業組合』を組織しようと業者に呼びかけました。しかし、全体の賛同が得られないまま時間が経過しました。そこで賛同できない理由を聞き出して、その解決策を示すことで賛同を得ることで、大正7年に『伊賀傘同業組合』ができました。生産者の組合の結成とその製品を売りさばく問屋の創業という環境が整ったこともあり、生産量は急増していきます。ある統計資料には昭和10年の生産量が170万本、生産額41万円から昭和11年の生産量が225万3千本、生産額57万8千円となり、その後も生産を伸ばしていきます。

しかしながら、その生産も洋傘に押され衰退していきます。上野で最後の和傘職人となった明治40年生まれの飯田政男さんが80歳を迎えたころに傘作りをやめます。平成4年11月に桑町の今中忠夫さんに取材した様子がありました。16歳から傘作り一筋。業界は洋傘に転換し始めたが、今中さんはコウモリのような生き方を良しとせず、降っても照ってもカラカサの紙を張り、油をひき、最後まで和傘に固執しました。

近年まで120軒あった傘屋は現在、12軒程がその名前だけを残しているようです。伊賀にこのような産業があったことを誇りに思います。